

# 戦時下大連・旅順における日本人女性

秋山洋子

## 1. 海を渡った若い妻たち

私は2005年4月から2006年3月まで、在外研究の機会を得て中国の大連大学に滞在した。大連という場所を選んだのは、同大学ジェンダー研究センターの主任教授が研究を通じての知人であったという偶然にすぎない。しかし、ここに滞在して街の持つ重層的な歴史の一端に触れ、関連資料なども読むにつれて、この街の持つ日本とのかかわりの深さに、あらためて興味をそそられた。大連の歴史に本格的にかかわる用意はまだないが、本稿では大連滞在中に再読し、新たな角度から見直した2冊の書簡集を資料として、太平洋戦争下の大連・旅順における日本女性の生活を紹介・分析したい。

遼東半島の先端にある大連・旅順は「満州国<sup>1)</sup>」の一部とみなされがちだが、じつは満州国成立のはるか以前、1905年の日露戦争の勝利以来日本の租借地となり、関東州と呼ばれていた。1906年には関東都督府がおかれ、32年の満州国建国後、34年からは在満州国日本大使館関東局の管轄下にはいった。「満州国」が実質は傀儡国家でも建前上は独立国であったのに対し、関東州は日本の直接統治下にあり、両者の間には国境が存在した。とはいえ、日本の植民地政策の観点からは、関東州と満州国は一体であり、居住者の意識にもそれが反映されていたことはいうまでもない。

中国東北地域への海の玄関である大連は、ロシアの都市計画を日本が引継いで、近代的大都市として急速な発展をとげた。また、満鉄本社の所在地として、日本の植民地政策の頭脳というべき役割をはたしていた。1945年敗戦時の大連市の人口は約80万人、日本人はそのうち20万人を占めていた。

旅順は日露戦争の戦場として有名な城塞都市で、大連とは当時の鉄道で1時間半の距離にあった。現在は軍事的要衝として外国人の市街地への立入りは禁止であるが、1937年までは関東州庁が置かれ、官立の旅順工科大学、旅順高等学校があるなど、関東州の中心として大連と相補関係にあった。終戦時の日本人は2万人足らずである。

この大連と旅順に、太平洋戦争の開始から終末に至る時期、2人の日本人女性が家族と共に生活し、その詳細を日本の実家に書き送っていた。それらの書簡が、戦後50年を経て編集公刊されている。第一の書簡集は、岩下壽之『大連だより——昭和十六～十八

年・母の手紙』(以下、大連と略称)である。手紙の筆者である岩下きみゑは、住友銀行行員である夫の赴任にしたがって、1941年7月、3歳と2歳の男児をともない船で大連に到着した。44年女兒を出産した後、不幸にも45年1月に35歳で病没するが、1943年10月まで実家に書き送った44通の手紙が残されている。書簡集の編者は筆者の次男であり、各書簡の後には編者による詳細な解説がつけられている。

第二の書簡集は深田妙『戦時下花嫁の見た「外地」——旅順からの手紙』(以下、旅順と略称)で、筆者の深田妙は1943年5月、一度の見合いで結婚式を挙げ、翌日には旅順高等学校の生物学教師として赴任する夫に従って旅順に旅立った。釜山まで海路、そのあと朝鮮半島を列車で北上し、満州国との国境安東で通関、奉天(現瀋陽)で乗り換え、大連、旅順という長旅である。1945年の終戦直前まで実家に書き送った手紙は170通にのぼる。書簡集を出版したのは、出版社を経営する子息である。

以上のように、2人の手紙をあわせると、1941年から45年と、太平洋戦争の開始から終戦まで、国民すべてを戦争に動員する総力戦体制が最高に達した時期の「外地<sup>2)</sup>」での生活と、それを支えていた主婦である女性の意識を具体的に知ることができる。

手紙の内容に入るまでに、このような手紙が送られた背景に少し触れておこう。どちらの手紙も、人目に触れることを予想せずに書かれたものであるが、筆の運びは闊達で、描写力に優れ、単なる資料として以上に興味深く読み進めることができる。これは、筆者がどちらも高等女学校卒だったことによるだろう。高等女学校の進学率は1925-35年、ほぼ15%で、現在の4年制大学に匹敵する当時の女性の最高学府といえる。良妻賢母をモットーに中産階級の主婦育成を目指した女学校であるが、生徒たちは実務的な家政より教養的な文学を愛する傾向があり、手紙や日記は女学生の内面世界を形作る上で大切なものであったという(稲垣, 2007)。こうした教育的背景によって、筆者たちは描写力とこまめに手紙を書く習慣とを身につけていた。

それにしても、これだけ多くの手紙が送られたことは、「外地」で暮らす若い妻たちの孤立感と、実家、とりわけ母親との絆の強さをも示している。旧民法では結婚は夫の家に入ることを意味し、舅姑との同居が一般的だったが、外地への赴任となれば核家族が標準になる。気楽である反面、肉体的・精神的に主婦の負担は重い。

主婦の仕事はとて多く、妊婦の方々にはお気の毒です。京都もそうでしょうけれど本当に生活に追われている感が深いのです。特に老人のいない社会、悪くいうと出稼人の社会であるだけにその感が深いのです。今日も延々と続く行列に、小さな子供をつれた婦人や妊婦がいかに多いことでしょう。(旅順, 43.11.9)

さらに、一度の見合いで結婚した夫と知らぬ土地での生活を始めなければならなかった深田妙は、夫との微妙な感情や生活感覚の食い違いを母に訴えることで、精神のバランスを保っているように見える。夫とは十分に話し合い、信じあい助け合っているように約束したといいながら、「でもお家の事を思うと淋しいので思わぬように努めています。お手紙書く時又ちょっぴり泣きますの」と母に孤独を訴える。主婦としては年季の入った岩下きみゑでさえ、「いらんことを申し上げて、またお母さんにご心配をおかけ致しますが、嬉しいことでも心配なことでも、なんでもお母さんにきいていただきたいくて」(大連, 42.11.20)と母への甘えを隠せない。これらの手紙が戦後50年を経て日の目を見たのも、娘の手紙を大切に保存していた母があってこそである。日本の家族研究において、制度としての「家」の陰に隠れた娘と実家との絆の強さは、もっと光を当てられるべきものだろう。

## II. 戦時下大連・旅順の日常生活

手紙の筆者たちは主婦なので、その内容も日常生活の具体的な報告が中心である。それが戦時下植民地の生活を如実に伝えて興味深いので、まずそこから見ていこう。

岩下家の夫は住友銀行大連支店勤務、預金係主任で月給は400円(大連, 41.8.14)。深田の夫は旅順高校の生物学教師、月給108円に外地手当がついて170.74円と、外地手当が基本給の5割にのぼる(旅順, 43.6.23)<sup>3)</sup>。岩下家には子供が2人、深田家は夫婦だけという差はあるが、公務員に比べて財閥系銀行の羽振りのよさがうかがわれる。他に両者とも1000円の赴任手当が支給されている。いずれにせよ夫たちは、金融と教育という植民地支配に欠かせない実務を担い、それなりの待遇を受けていた。

手紙の書き手である女性たちは専業主婦である。2人とも女学校を卒業し、教職資格も持っているが、「高等の教育を受けさせて頂きましたけれどやはり結婚して家庭を持たねば未だ一人前の女といえないと感じております」と通念を疑わず、「今後しっかりきばります」とけなげな決意を固めている(旅順, 43.6.2)。教育のある専業主婦=良妻賢母は、日本近代化の中で形成された規範であるが、日本が植民地支配に乗り出すにあたっては、植民地の女性教育のための規範としても利用された。たとえば中国では、富裕層の夫人は家事を用人に任せ自分は社交や娯楽を楽しみ、貧困層では専業主婦どころではない。そこで、満州国での女性教育において、働き者の日本の主婦像は、見習うべきモデルとして提示された。手紙に見る2人の日常も、家事労働や銃後の奉仕に明け暮れる、模範的な主婦の生活といえるだろう。

## 1.文化住宅と住宅難

外地に赴任して最初に直面するのが住宅の問題である。大連の都市建設は、壮麗な公共建築による威風を誇ると同時に、住宅にも力を入れた。中国人と日本人の居住地は区別され、日本人居住地ではスラム化を防ぐため、木造など粗末な住宅の建設を禁止し、厚いレンガ造りの「文化住宅」が建設された(西沢, 1999)。それもあってか、増加する人口に住宅の供給が追いつかず、岩下家が最初に入居したアパートは手狭だったが、「時節柄家のあったことだけでも感謝しなければ」と、結局3年間住むことになる。狭いとはいえ2階建てのアパートは頑丈な造りで、編者の岩下壽之は1993年大連を再訪し、老朽化はしたが健在で住人もいる旧居を確認している。

深田家は二階建ての官舎の上階に入居し、家具も学校から貸与された。冬の寒さに備えて窓は二重窓、11月から3月まではストーブをたくが、ストーブを炊く期間は市が決めて、取り付け取り外しを行い、煙突掃除も市がやってくれる。それ以外の時は、補助に火鉢を使う(旅順, 43.5.29, 6.13, 11.9)。ストーブの燃料は石炭や薪、大連では炊事にガスが普及していたが旅順にはなく、四分の一の家庭で電熱器を使用できた(旅順, 43.6.2)。

冬はさぞ寒いだろうと覚悟してきたのにストーブのおかげで室温は18-20度、「冬は満州ですごくものだとしみじみ思ひました」(大連, 42.1.29)と岩下きみゑは感激している。当時の日本では、北海道を除けば暖房で室内全体を暖めることは少なく、主としてコタツ、火鉢、囲炉裏といった部分暖房に頼っていた。

都市計画には上下水道が組込まれ、水道はもちろん、内地の一般家庭では珍しい水洗便所も備わっていた。ただ、冬は水が凍るため、特に寒い年は下水や風呂場、水洗便所の故障が続出という「文化住宅式の建物の悩み」もあった(旅順, 45.2.16)。

## 2.悪化してゆく配給事情

日常生活において、一日も欠かせないのは食料であり、手紙にはほとんど毎回食についての記述がある。日本では1939年に米穀配給統制法が施行され、配給制度が実施されていた。大連も主食や調味料は定量の配給制で、月当たり米は4人で3斗、砂糖3斤、酒は一家庭に3升、「昨日から味噌・醤油も切符制になりました」。野菜・肉・魚・卵などの食料品は公定価格が定められ、商店で売られていた。靴や木綿衣料も切符制で総量の規制があり、その枠内で希望のものを購入する。このような統制経済の下でも、小規模な小売商は許されていた。「満人が多いだけに行商人が多く、毎日、お花屋、ガラス屋、いかけや、なほし(下駄)や、綿打直し屋、煙突掃除人、野菜や、果物や、とうふや、など二、三人づつ午前午後と回ってゐます」。行商人は掛け値がうまく、それを値切るのも主婦の腕の

見せ所だった(大連, 41.8.14)。

食糧事情は総じて内地より豊かで、対米開戦後の冬も、「内地の方は物が不足のやうですが、こちらはまだまだ沢山ございます。(中略)去年内地で不自由したお野菜も全部毎日野菜屋が車で持ってきます」。内地から輸入される野菜もあり、値段は高い。逆に牛肉は公定価格なので、ロースの上等もスジ肉も同じ値段で早い者勝ち。米は「今月から」減って、大人が1人3.5合、子供が2合とある(大連, 42.3.□)。

42年5月からは米の配給量が内地と同じになり<sup>4)</sup>、もち粟やメリケン粉〔小麦粉〕が配給されるようになる(大連, 42.5.10)。7月半ばからは、急に食料が不足し、キュウリ1本買うにも何十人の行列ができ「このまま行けば、今に食べるものがなくなるのでは」と心配する(同, 8.5)が、9月には野菜も魚も肉も市場にもどる(同, 9.29)。しかし主食は厳しく、「こちら九月からいよいよお米が減って、もち米の配給もなくなりましたので、お昼だけは代用食です」と、パンやうどん、芋などで昼食をすませる報告がある。現在は死語になった代用食という言葉は、私の子供時代にはまだ使われていたが、粉食や芋類を主食とは認めない日本人の食意識を反映した言葉である。

43年の正月には、餅が4キロ配給になり、鶏肉、牛肉、魚肉も十分買えて豊かな新年を迎えた。「こちらにゐるおかげでせう」と喜んでいるが、軍事的には警戒管制がしかれ、内地からの着信も不規則になるなど緊張は進んでいる(同, 43.1.8)。菓子がなくなり、暮にビスケットの配給があったきり。朝早く森永製菓と明治製菓に行けば羊羹や飴が買えるが、200人も行列で子供の小さい家では買いに行くのもままならない(同, 1.29)。

43年5月末到着した深田妙は、「物資はかなり豊富のようですけれど、御飯は大豆入らずいぶん黒いまずいものでした」と外食券で食べた旅館の食事を報告している(旅順, 43.6.2)。米は2人で1月23キロ<sup>5)</sup>だが、その中に必ず大豆とメリケン粉がまじる。近くに購買組合と中国人の食品店があり、魚、卵、野菜が公定価格で買える(旅順, 43.6.2, 6.5)。魚はかなり豊富だが、肉の配給はまれで、豚肉50匁〔1匁=3.75グラム〕の配給に朝8時前に出かけて行列し、帰ったら11時半だった(同, 7.2)。

「こちらへ参り三ヶ月がたちました。祝さん〔夫〕の誕生日にはお魚なきため野菜の天ぷらにビールを抜いて祝いました。昨今食料もかなり欠乏をつけております」(同, 43.8.25)。「冬季の野菜欠乏に備えてどこのお宅も買出しに大童です。(中略)今晚は肉なしのキャベツ巻をします」(同, 11.9)。大連では6月から魚が配給になったが、配給日でなくても午後行けば買える、旅順では十二月から配給と、多少の地域差があるが、内地並みの厳しさに近づいている。

44年深田家の正月は、黒豆、数の子、煮しめなど野菜と乾物中心だが、えび3尾、魚が3種4尾正月用に配給されている。そのほか、缶詰、鱒、マーガリン、いりこ〔煮干〕など「潤

沢」な正月用の配給があった(旅順, 44.1.2, 1.13)。しかし、それ以後の日常では、配給事情は目に見えて悪化してゆく。例えば、43年の到着当時は1人3個買えた卵が、44年2月には2個配給(同, 44.2.14), 8月には「幸い久しぶりに卵一コ宛配給」。ついでに饅頭も1個ずつ配給になるが、先々月まで5銭だった饅頭は、先月は8銭、今月は13銭という値上がりだ(同, 44.8.24)。次の卵の配給は4ヵ月後の年末に1個ずつ、年明けにさらに1個配給になり喜んでいる(同, 44.1.22)。肉は44年1月豚肉40匁(同, 44.1.30), 1年後には「お肉は何ヶ月に一度位、年末に一人二十匁」(同, 45.1.22)となっている。冬季は野菜も不足し、十日に一度大根、人参のみで(同, 45.4.4.), 医者から脚気といわれ注射と投薬を受けている(同, 45.4.11)。

不足する野菜の補いも、二階住まいでは室内での鉢植え、野草摘みが精一杯。夫が学校農園に割り当てられた土地にほうれん草、小松菜、二十日大根などの種まきをした(旅順, 45.4.26)。その後、幸い一戸建ての官舎に空きができ、6月に転居、張切って畑作りを開始する。トマト、かぼちゃの苗を植え、青菜や根菜の種をまき、「今年はとにかく、来年は計画を立てて自給自足せねばと張切っています」(同, 45.6.18)とあるが、2ヵ月後に敗戦を迎え、この家で次の年を迎えることはなかった。

食糧難を乗り切るもうひとつの知恵は、実家との小包のやりとりだった。岩下も深田も、実家とは手紙だけでなく、小包もこまめにやりとりし、食料、衣料、嗜好品や雑貨など、手に入ったものを融通しあっている。また、送ってきた品に余裕があれば近所と分けあう相互援助が成り立っている。小包には禁制品があり、見つければ返送されたうえ罰金をとられた。禁制の小豆をどうしても送りたかったので、大豆の中に隠したという手紙もあるが、検閲されたら危ないところだ(旅順, 44.12.3)。

以上のような厳しい食糧事情だが、主食については小麦粉、高粱、大豆粉などが混るとはいえ、45年に至っても「お米だけは潤沢に頂けて何より有難いこと」(旅順, 45.5.4)というのだから、飢餓線上にあった内地に比べれば格段の好条件である。

じつは、植民地での配給は、民族による差別があり、日本人は米、朝鮮人は粟、中国人は高粱が基本とされていた。中国人はたとえ金があっても闇で米を買って食べることは食料統制違反を犯すことになった<sup>6)</sup>。日本人が米に不自由しなかった陰には、このような差別的配給体制が存在していたが、彼女たちはそれを知っていたのだろうか。

また、経済統制の隙間を縫って物資の生産・供給をしていたのは現地の農民・商人であるが、その恩恵を受けながら、「やはりこちらは外地にて、満人が直接生産にあづかっていますので統制政策の方もなかなかむつかしい様子で、内地では考えられないようなこともないではありません」(旅順, 45.5.4)と官側の口調で批判しているが、これも余裕があればこそで、本当に飢えたらこんな建前論は口に出せなくなるだろう。

### 3.着物からモンペへ

日本国内では、食糧について衣料切符制が42年2月からが実施された。大連ではそれ以前にも、ゴム靴や木綿物は配給という報告がある(大連, 41.8.14)。切符制では年間の購買量が一定に制限されるので、衣類は購入よりも手持ちのものの活用に重点が置かれ、洗濯、仕立て直し、布団造りなど、主婦にとっては重い仕事が折々に報告されている。

衣についての記述で興味深いのは、戦時下の服装統制が進んでゆく状況がうかがわれることだ。この時代の服装は、職場や学校では洋服、家庭では和服という二重構造になっていた。したがって夫と子供は洋服だが、主婦である妻は和服ということも多い。『大連だより』の家族写真でも、夫と子供は洋服で、妻のみみゑだけが和服姿である。

しかし、非活動的で華美な服装は非常時にふさわしくないと、国は服装の統制にのりだし、男性には国民服が制定され、女性には非常時の服装としてモンペが強制されるようになる(若桑, 2005)。とはいえ、服装の規制は対米開戦後すぐ始まったわけではなく、「今日はモンペ姿のままでお買物に行きました」(大連, 43.5.20)と特記している所を見ると、和服姿での外出もかなりの期間ふつうに行われていたのだろう。

まだ娘気分の抜けない深田妙は、和服の長いたもとを元禄袖に縫い直し、それを着て外出したらほめられたと喜んだり(44.2.16)、増税になる前にとパーマ<sup>7)</sup>をかけたり(44.3.31)、おしゃれもそれなりに楽しんでいる。モンペ式上下のための反物を実家から送ってもらおうと、妹に手紙でデザインを相談する(44.6.24, 7.1)。夏のモンペは暑いのでふだんはワンピースだが、防空訓練で「今日は気がはっているのかモンペを少しも暑いと思いません」(44.7.30)と、和服と洋服を併用している。

最後の冬はさすがに、「こちらはもう古いも若きも男も女も黒っぽい防空服装で、風が寒いので防寒帽を頭からすっぽり被り、目ばかりぎょろぎょろさせてせかせかと歩いています」(44.12.21)と、気候の厳しさと戦局の厳しさとが重ねて報告されている。

## III. 総力戦体制の下で

### 1.隣組と防空演習

岩下一家が大連に着いた1941年7月、大連は軍事的な緊張下にあった。

内地から来た兵隊が、毎日家の前を通ります。北支の方へ行く兵隊達らしいです。毎日馬と人が何百人となく夜の十一時まで通ることがあります。内地はどうでせうか。とてもタダゴトではないやうなきがします。(大連, 41.8.14)

41年7月といえば太平洋戦争開戦の半年前であるが、この時点で、政府や軍部の首脳が対米開戦の方針を固めていたわけではない。中国との戦争は長期化し、国民を銃後に総動員する総力戦体制が整いつつあったが、それはむしろ戦争の日常化というべきものだった。大連の緊張は、7月下旬から九月にかけて「関東軍特殊演習(関特演)」が行われ、70万という兵力が「満州」に送り込まれたことによる。6月の独ソ戦の開始を契機として、米国よりはソ連を仮想敵とした大規模演習が計画されたのだ。

岩下家が落着いた家は、大連港から大連駅への通り道にあった。そのため、連日の兵馬の行進を目にすることになったのだ。続く手紙では、兵隊へのお茶の接待に5日に1回かりだされ「とても大変」、数千人の兵士が市内に滞在しているため急に品不足になった、などと訴えている(大連, 1941.8.26)。

しかし、日米の開戦によって日本の戦略的重点は南方へ移り、それ以後は比較的穏やかな戦時下の日常生活がもどってくる。

一般市民を戦争体制に組込む総力戦体制は、日中戦争の本格化と共に整備されていくが、その最底辺を担ったのが、国民精神総動員運動の実践組織として1938年に組織された「隣組」だった。10軒足らずが1単位となった「隣組」には、情報の通達や結束のために、毎月の「常会」が課せられていた(加藤, 1982)。岩下の夫も到着半月後の8月14日、組長の家で臨時常会に出席し、ビールをご馳走になって10時ごろ帰宅している。他の出席者は女性だったというから、あまり緊張した感じではない。「十月はうちの番」とあるように、常会は各家持ち回りで開かれていた。

43年に旅順に赴任した深田の日記にも、隣組の常会は登場する。臨時常会で20円の国債を買わされた(旅順, 43.10.21)、自宅で常会を開き「責任が済んでホッとしました」(同, 43.12.10)、常会で婦人部の班長を引き受けさせられた(同, 44.4.9)などなど。婦人部の班長は、いくつかの隣組の組長を統べる役で、若いのに「責任重大」と緊張している。

隣組は配給など日常生活の基本単位であったと同時に、防空演習などの「行事」への動員も担っていた。大連到着直後の岩下の手紙で、8月いっぱい防空演習が行われるとあるのは、関特演に関連したものだろうか(大連, 41.8.14)。防空日は旅順でも定期的であり、「長袖の服にモンペ靴のいでたちで出かけないとお目玉です」(旅順, 43.7.17)。同年9月には旅順市内で防空基本訓練競技会が開催された。地区対抗のため連日練習を行っているが、空襲を受けるという切迫感はなく、どちらかという運動会気分です。「花々しく競技がくりひろげられた」。「出にくい家庭の主婦の出場ですが皆元気に活躍、学生時代にかえったように思いました」という一節は、銃後の活動がある種の女性解放だったという加納実紀代のコメントを想起させる(加納, 1995,p.89)。

1944年夏になると大連にも米軍機の来襲があり、各家庭に防空壕作りの指令が出る。



「こちらは緊張して来たとは申せまだ植民地気分が抜けきらず、その点菌がゆく存じております」(旅順, 44.7.25)。45年となると、緊迫感はさらに強まり、救急訓練はいつも理由をつけて出ない人も強制参加させられた。「男の人が急に少なくなった」というのは、関東軍精鋭部隊が南方戦線に送られた後を現地召集兵で埋めていった影響が眼に見える形で出てきたのだろう。岩下きみゑは45年1月に病死するが、夫は2人の幼い男の子を残して5月に現地召集された。深田妙も夫が招集されることを覚悟して、自分の教職免許について実家に問合せている(旅順, 45.7.17)。戦争の最終段階での現地召集は、それまで一般市民だった多くの人を戦死やシベリア抑留という運命に追いやったばかりでなく、残された女子供の引揚げをめぐる悲劇をも倍加させた。

## 2. 銃後の女の総動員

家族単位の組織である隣組と並んで、女性を動員する組織もあった。「満州国」成立以後、大日本愛国婦人会満州本部(1933)、国防婦人会満州地方本部(1933)、中国人女性を組織した大満州帝国国防婦人会(1934)と、複数の女性団体が結成された。これらの団体の統合が唱えられ、1938年4月、民族を超えた満州国防婦人会が成立、関東州地方本部も結成された。活動の目標は「婦徳にもとづく家庭の強化、銃後の支援、民族協和」であった(劉, 2004年, pp. 76-105)<sup>8)</sup>。

43年6月に旅順に到着した深田妙は、さっそく「満州国婦」に入会している(旅順, 43.6.13)。岩下の手紙には国防婦人会の名称は登場しないが、関特演の兵士にお茶の接待をしたのは、婦人会としての動員だろう。

国防婦人会の活動は、「大詔奉戴日にて国婦としてタスキをかけ、遥拝式に参加」のような集团的決意表明、「陸軍病院に白衣の修理に奉仕」(旅順, 43.7.8)、「松村部隊(陸軍病院)に行き、大連の高女の慰問演芸をみました。(中略)とても楽しい半日でした」(同, 43.10.27)のような慰問や、裁縫、お茶汲みといった女の特性を利用した活動が中心で、ときには外出しにくい主婦の気晴らしにもなった。

しかし、44年になると「婦人会から部隊へ奉仕に行ってます。仕事の種類は申上げられません、決戦作業に従事して終日元気に働いております」(同, 44.9.3)と、実質的な労働力として利用されるようになる。「炎天下の土木奉仕」は翌年もあり、「この苦しさも他日敵をこの地に迎えて戦わんとする日本婦人の尊い鍛錬と思ひ、進んで参加し体を鍛えております」(同, 44.6.18)。現地召集で男手が減っていく中で、銃後の奉仕でもジェンダー領域の再編がおこっていた。

### 3. 決戦の覚悟

太平洋戦争の戦局はしだいに悪化し、その一端は新聞やラジオでも報じられた。サイパン島玉砕のニュースを聞いた深田妙は、次のような決意を披露する。

すべてを犠牲にしても国家の進むべき方向へ私達すべてが突進せねばならないと存じております。小我を捨てるといふ事は本当にむづかしい事ですけれど有史以来の日本の国を守る為に個人の存在など本当に軽いもの、喜んで国のためならどんな事でもしたいと心から願っています。(中略)女の私には今すぐお国に役立つ事はありませんけれど、戦争目的遂行のために私達の生活自身を国家と共に進んでゆきたいと思っています。(旅順, 44.7.25)

そのあとも「いざとなればペリリュー島の婦人のように立派に戦い、そして日本の女らしく死ぬ積り」(旅順, 44.10.15), 「ここを死所と決めてしまえば、心は平静です。しかしどうにかして一日でも長く生きて、息ある限りご奉公し、日本の勝利を見届けたい念願です」(同, 45.7.17)と、死の覚悟が語られる。戦況が絶望的なことは推測しながらも、あくまで国に忠実な、模範的な銃後の決意が語られる。

このような模範的な言辞の背後には、検閲への意識が働いたかもしれない。当時、関東軍は関東憲兵隊の管轄下におかれていた。日中戦争勃発後の1937年、関東軍は「電話、電報、手紙検閲方法」を公布し、その後戦争の拡大に伴って検閲は強化され、軍事郵便から一般市民の手紙にまで及んでいった(小林他編, 2006)。

1941年の大連からの手紙では、関東軍特別演習で兵隊があふれた大連市の様子などはばかる様子もなく書かれている。しかし、12月の日米開戦については、「此の頃内地は大変でせう。こちらは毎日夜十一時すぎまで東京のニュースをきいてみます」と言葉少ない。編者の岩下壽之は検閲を意識したのではと推測している(大連, p.71)。

旅順からの手紙では、1944年4月9日付が検閲済され(封筒下部を切断し、検閲のあと「検閲済 関東逓信官署通信局」と印刷したシールで封がされる, 同書p.223写真), その後もしばしば検閲があったという。1944年12月21日付は2枚没収, 45年1月14日に「正ちゃんからのお便りも検閲されて来ました。私のは多分気温などのことを書いて切り取られたのでしょう。これからは注意せねばと思います」というのは、没収された手紙についてのコメントだろう。気温についてさえ問題になる状況では、時局に対する批判を率直に表現するのは、はばかられたことだろう。

ただ、深田妙の手紙を読む限りでは、随所に表現されている銃後の決意は、本心を偽ったものとは思えない。むしろ、女学校の教育を受け、読書が好きで、新聞や雑誌にも目を通していた深田は、国の発するメッセージに素直に自己同一化していたのではな

いか。戦局の不利を知っても、国に疑いを向けるよりは、「日本の女らしく死ぬ」ことに心が向かう。南方の島での一般市民の玉砕をたたえる報道は、敗戦後の「満州」でも、死ななくてすんだ女性たちまで死に追いやる役目を果たした。

戦争への疑問や抵抗は、身近な人の死と結びつくときに、かすかに表面にのぼってくる。たとえば、同級生の弟である海軍予備学生が友人と4人連れて遊びに来た日、楽しいひと時の描写のあとで、「この人達が又やがては戦場で別れ別れになってご奉公なさるかと思うとなんとも云えぬ気持です」ともらしている(旅順, 45.1.14)。戦争に行くな、死ぬなどは言えない、ぎりぎりの表現であろう。

岩下きみゑの手紙には、時局への言及はあまりない。「内地に負けないやうにしっかり銃後を守っています」と言った直後には、「昼は男の人が家にゐないので何かと忙しくてきりきりまひです。幹事などいやになりました」と愚痴をこぼしている(大連, 43.5.20)。家事と育児に追い回される、ごく普通の主婦の感覚だろう。

#### IV. 見えていなかった「外地」

大連、旅順はいうまでもなく「外地」であり、日本人は少数派だった。租借地になって以来、日本からの移住者は激増するが、山東省をはじめとする中国国内からも、大量の中国人が仕事を求めて大連に流入した。大連に着いた岩下きみゑは報告する。

人口六十万の中、二十万が内地人で、他は全部満州人<sup>9)</sup>ですので、市電などに乗ると殆ど支那人です。道を歩いてゐても十人まではきたないきたない支那人です。商人も殆ど支那人でとてもアイキャウ者です。はじめのうちは気持が悪くていやでしたが、此の頃はすっかりなれてしまひました。船のボーイが「大連は日本人がゐるばって暮せるからいいですよ」と言つてゐましたが、ほんとうに子供までが日本人はゐるばっています。(大連, 41.8.14)

内地から来た岩下の目には、日本人の威張りようがよほど印象に強かったのだろう。満州国の熊岳城温泉へ旅行した際も、「どこへ行っても支那人が八割以上」だが、「[巡警が]支那人に対してはとてもきびしいので、日本人に対してはかはいさうな程遠慮してゐます」と言っている(大連, 41.11.4)。

塚瀬進の『満洲の日本人』は、1907年から1943年まで大連で発行されていた『大連日日新聞』を資料として当時の日本人の生活を具体的に再現した研究であるが、そこに浮かび上がってくるのは、上は政治家や満鉄の幹部から、下は無職の流れ者まで、日本人だけで集まり、日本国内より贅沢な生活を享受し、日本の習慣を維持しようとする日本人の

姿である(塚瀬, 2004年)。また, 柳沢遊の『日本人の植民地体験』によれば, 20世紀前半の日本史は50年のうち約21年がアジア諸地域への侵略戦争に費やされたが, 戦争の被害が直接日本国内に及ばない段階では, 局地戦争は不況を解決し移民や市場を拡大するものとして期待され, その期待を最も強く持っていたのが, ほかでもない在外居留民であったという(柳沢, 1999年)。新来者の目に映った威張る日本人の姿は, このような植民地における日本人のありようを象徴していた。

深田妙は, 中国人と接した第一印象を「支那人がやはりとても多く聞きしにまさるマンマンデー漫々然です」(旅順, 43.5.29), 「支那人は日本人にとっても丁寧です。自分達同士では支那後で話していますが, 私達には日本語を使います」(同, 43.6.5)と書き送る。

二人の手紙の中には, 中国人に対する共通したイメージが存在する。ひとつは商人や馬車の御者などに対する「アイキャウモノ」「親切」「丁寧」などの表現で, 商売上手な中国人を髭髻させる。『日本人の植民地体験』は, 大連に進出した日本人商工業者の歴史をたどることで日本人の戦争体験を再考しようという本であるが, 著者によれば, 大連の中国人商工業者が日本人相手の商売に進出し, 日本人商人のシェアを奪っていったのに対して, 日本人は中国人市場を開拓するよりは政策的な保護を求め, 国家・満鉄への依存と協力を強めていったという(柳沢, 1999)。

日本人が接触する相手として商人と並んで多かったのは家事使用人だが, 子供の二人いる岩下家は, 通いの家政婦を頼んでいたようだ。実家の父が病に倒れ, 看病のため帰国したいが, 信頼していた家政婦がやめてしまい, 「外の家政婦ではうっかり留守はさせられません。とんだ目にあひますので」と困っている(大連, 1943.5.20)。「とんだ目」というのは自分のことではなく, ほかの日本人が留守中に家政婦に衣類を売り飛ばされたという話のようだ。その一方, 前にいた家政婦なら「子供もよくなれてゐますので, 安心して任せて私一人でかへりますが」と, 全幅の信頼を寄せている。このような信頼関係は, 植民地支配という大枠の中にも存在していた。数多く書かれた引揚げの体験記には, 使用人や隣人など身近な中国人に助けられたという記述が少なくないが, これも日ごろの人間としての関係があったからこそだろう。

このほか, 岩下には, 銀行支店長だった夫の部下6人のうち2人は「満人」だが, 2人とも立派な家の息子で月給など当てにしないので「随分やりにくいやうです」(41.8.14)とある。日本企業の中国人従業員は, 植民地支配体制を構築する全体的な必要を優先させて, 能力よりは有力者とのコネで雇われていたことがうかがえる。

中国人に対する二番目のイメージは, 「きたない」「不潔」というものだ。岩下は「きたないきたない」と繰り返しているが, 深田の詠んだ短歌にも「不潔なる満人多きバスの中目を見開きてわれ独り立つ／朝焼けの雲の赤さよ満人の好む色かもただれし如し」

(旅順, 43.8.25)とある。彼女の短歌は女学校で教えられたような折目正しいものが多く、この二首が発する拒絶感は際立っている。この拒絶感は、直接接触する相手に対してよりは、街でいきあう群集に対して向けられる。大連港で働いていた苦力クレーと呼ばれる港湾労働者がその代表的だろう。「きたない」という生理的な拒絶は、相手との間に絶対的な壁を作り、相手の貧困や従属的立場への想像力を奪う。これは現在日本の少年たちのホームレスに対する視線にまでつながるものかもしれない。

結局、働き者の主婦、実直な市民である植民者の目には、周囲にいる中国人の姿は見えなかった。状況が悪化するにつれ、日本への自閉はかえって深まってゆく。

戦局が苛烈になればなるだけ、日本人の血の尊さを深く思います。大東亜戦争も日本人の血の団結がなくてどうして成就出来ましょうか。私は決して満人やその他の大東亜の人々を軽く見るのではありませんが。(旅順, 45.5.4)

## V. 苛酷な結末

深田妙の最後の手紙は、1945年7月24日付である。夫が学生の教練で疲れて帰ってきた話と共に、桃が出始め、リンゴもまもなく出るだろう、職場で南京豆の配給があったが送れなくて残念と、屈託なく書いている。1月经たなうちに敗戦を迎え、難民同様の生活に入る予感はまだでない。

敗戦と同時に、大連・旅順もソ連軍の支配下に置かれた。10月には旅順の日本人は大連へ立ち退きを命じられ、大連在住の日本人も多くは家を没収されて共同生活を余儀なくされた。それから引揚げが開始されるまで1年半、仕事もなく、日本への連絡もできない難民同様の生活が続いた(この間の状況は、富永、1999年に詳しい)。

深田妙にとって最もつらい経験は、この期間に妊娠・出産し、ひと月足らずでその女の子を死なせたことだった。それまで妊娠を望み、流産も経験したというのに、皮肉なことである。それでも47年2月、夫婦そろって無事に帰国することができた。

岩下家の運命はさらに過酷だ。前述したように手紙の筆者きみゑは三番目の女兒出産後、45年1月に病死した。夫はその直後5月に現地召集を受け、終戦で捕虜となった。後になって、46年に朝鮮の収容所で病死したことが判明する。残された三人の幼い子を守って日本まで連れ帰ったのは、きみゑの看病に呼び寄せられた19歳の姪だった。彼女がいなければ、岩下壽之の述懐どおり、三兄妹は残留孤児になっていたかもしれない。

戦時下に「外地」で生活した人々は膨大な数にのぼり、回想記の数に事欠かない。ただ、回想というフィルターにかけられた場合、当時の実感とはさまざまなズレが生じる

ことになる。坂田晶子は「満州」にあった学校の同窓会誌を分析し、そこで「想起されているのは、歴史的な事件へと焦点化され、確定される記憶ではなく、日常的な生活を囲む風景や交友関係、学校生活といった失なわれてしまった過去のささやかな情景である。このような生活の情景が彼女たちの植民地での生のリアリティをなしているといえるだろう」と述べている(坂部, 1999, p.114)。

ここに紹介した手紙もまた、日常的な生活を囲むささやかな情景の描写であるが、時間による加工を経る前の生の素材として提供されている。それだけに、実直に生きる生活者が、その半面で神がかり的な戦争宣伝に簡単に自己同一化し、絶望的な状況を具体的に認識しながら、その結果が自分の運命に何をもたらすかは想像できず(あるいはあえて思考停止し)、身近な人にはやさしく誠実だが、自分たちが抑圧している他民族には意識が及ばないという矛盾した実態がそのまま浮かび上がってくる。ここに見られるのは、植民地支配という大きなメカニズムの一端を担わされ、その役割を精一杯果たしたあげく、身をもってそのツケを支払わされた人々の物語だ。私たちはその後の50年で、それを笑うことができるほど、賢明になっただろうか。

### 参考・引用文献

- 稲垣恭子『女学校と女学生——教養・たしなみ・モダン文化』中公新書, 2007年  
岩下壽『大連だより——昭和十六～十八年・母の手紙』新風社, 1995年  
同 『大連・桃源台の家』新風社, 1997年  
同 『大連を遠く離れて』新風社, 1999年  
小林秀夫／張志強編『検閲された手紙が語る満州国の実態』小学館, 2006年  
加藤朱美『トントントンカラリと隣組』『銃後史ノート復刊4号』, JCA出版, 1982年  
加納実紀代『女たちの銃後』インパクト出版会, 1995年  
坂部晶子『「満洲」経験の歴史社会的考察——「満洲」同窓会の事例をとおして』『京都社会学年報』第7号, 1999年  
竹中憲一『大連 アカシアの学窓——証言 植民地教育に抗して』明石書店, 2003年  
塚瀬進『満洲の日本人』吉川弘文館, 2004年  
富永孝子『大連・空白の六百日——戦後、そこで何が起きたか』新評論, 1999年改訂新版  
西沢泰彦『図説 「大連」都市物語』河出書房新社, 1999年  
深田妙『戦時下花嫁の見た「外地」——旅順からの手紙』インパクト出版会, 1994年  
柳沢遊『日本人の植民地経験——大連日本人商工業者の歴史』青木書店, 1999年  
山本有造編著『「満洲」記憶と歴史』京都大学学術出版会, 2007年  
劉晶輝『民族, 性別与階層——偽満時期的“王道政治”』社会科学文献出版社, 2004年

若桑みどり「総力戦体制化の私生活統制——婦人雑誌にみる「戦時衣服」記事の意味するもの」, 吉川弘文館『軍国の女たち』2005年

## 註

- 1) 地域の呼称としては「満洲」という表記が正しいが、現在は日本でも中国でも「洲」の略字として「州」が使われ、「満州」と表記されているので、引用文以外はこちらを使用した。「関東州」の「州」のほうは行政区画を意味するこの字が正しい。なお、満州国は傀儡性を強調する意味で初出にはカッコをつけたが、歴史的用語としてそのまま用いた箇所もある。
- 2) 戦前の日本では、植民地を「外地」、それに対する国内を「内地」と呼んでいた。「外地」という語は、外国ではないが日本でもないという、植民地に対する人々の認識を反映している。
- 3) 1937年公務員上級職の初任給75円、1942年入社12年の銀行員の給与が172円である(週刊朝日編『値段の風俗史』朝日文庫、1987、p.587,600)。
- 4) 日本国内は1941年4月1日より6大都市で大人1日2合3勺の米穀通帳配給制が実施されている。
- 5) 1升を1.5キロと計算すると、2人で1月23キロは、1日1人2合3勺にほぼ相当する。
- 6) 竹中憲一『大連 アカシアの学窓』は、植民地化の教育の実態を体験者から聞き書きした証言集だが、弁当を持ってこれなかった児童のために日本人の女性教師が握り飯を持参したが児童は怖れて食べなかったとか、日本人と同じ学校に通いながら米の弁当を持っていけないために惨めな思いをした、といった挿話が採録されている。
- 7) 若桑(2005)によれば、1939年2月に「国民精神総動員強化方策」が決定され、6月にはパーマネント禁止などの規制が加えられたというが、これは精神的規制だろうか。「外地」だからか、関東州では44年になっても営業が許されていたことがわかる。
- 8) 日本国内では1942年2月2日、愛国婦人会、大日本国防婦人会、大日本聯合婦人会の3団体が統合されて大日本婦人会となるが、「満州」での統合はこれに先駆けたことになる。
- 9) この引用文では「満州人」と「支那人」が併用されているが、意識して使い分けているのではなさそう。日本国内では一般に中国人を「支那人」と呼んでいたが、満州国では中国人とは違うと強調するために、漢民族・満州民族を含めて「満州人」と呼んでいた。2人の手紙では、最初「支那人」が使われるが、慣れてくると「満州人」「満人」になってくる。なお、『大連 アカシアの学窓』では、学校で中国人の子供たちに「関東州人」と称するよう強制したとあるが、この語は手紙には登場しない。